



Conseil Mondial de la Famille Marianiste

Via Latina 22, 00179 Roma, Italia – www.marianist.org
Tel (+39) 06 70 47 58 92 – FAX (+39) 06 7000 406

World Council of the Marianist Family
Consejo Mundial de la Familia Marianista

世界マリアニスト家族評議会

世界マリアニスト祈りの日

- 2016年10月9日 -

ボ・ナンコントルの聖母バシリカへの巡礼 歴史

ボ・ナンコントルという町は、中世紀ではポーと呼ばれました。現在の名前になったのはおとめマリアの小さなご像が発見された16世紀です。言い伝えによると、1550年頃、労働者階級の家族の末子で生まれたジャック・フレシネが、牛の群れの世話をしていると、一頭の牛がいつも一本の低木の前にひざまづくために群れを離れるのに気づきました。不思議に思ったこの若者は、その低木に近づいたところ高さ30センチぐらいの聖なるおとめマリア像を発見しました。ご像を家に持ち帰って母親に見せると、母は、“あらまあ！神様がこの“よき出会い”[bonne recontre]を恵んでくださいました”と叫びました。これによって小さなご像もこの町もその名前と呼ばれるようになりました。ご像は家の戸棚に置かれました。しかし、サント・ラドゴンド教会の主任司祭がそのご像を見たいと思い持ってくるようにと言う

と、ご像は戸棚から跡形もなく消えていたことがわかりました。若いジャックは同じ低木にご像を再発見し、それを主任司祭のところを持って行きました。主任司祭はご像をふさわしいところに置きましたが、ご像は“不満足”のようで、また低木のところに戻りました。ご像の意向をやっとわかった主任司祭は、低木のところに木製の十字架を立て、十字架の最下部にあったくぼみにご像を配置しました。その後十字架の場所に小聖堂が建てられ、献堂式は1551年8月27日に行われました。そこで起こった奇蹟によって、その巡礼地の由来が確かなものであるという証印が押され、すぐにかなり重要視されるようになった巡礼の習慣が始まりました。1600年には、おとめマリアの巡礼堂の隣に教会が建設されました。アジャンの大司教ニコラ・ド・ヴィラルールの指導の下に始まったこの建設事業は、1604年に完成されました。



ボ・ナンコントルの聖母バシリカ

1611年からフランス革命の時まで、この巡礼の地は、聖フランシスコの第三会によって担当されました。第三会のボ・ナンコントル修道院はマルグリット・ド・ヴァロワによって創立されました。

19世紀の半ば頃、当時の聖堂は狭かったために巡礼者の数に対応できなくなり、現在のバシリカ、“ボ・ナンコントルの聖母バシリカ”を立てる決定がなされました。

敬虔な巡礼者の手で触れられたためその顔がすり減ってつるつるになった、材質不明で高さ21センチぐらいの奇跡を起こすこの小さなご像は、教会を訪れた人が見られるようにバシリカの主祭壇の後ろにある聖遺物箱に納められています。

ヴザンの司教の支援をえて、またボ・ナンコントルのバシリカ改修計画の責任者だったコンヴェール師の要請を受け、マリスタ会がイニシアティブをとって大きな聖母マリア像を丘の上に立てました。最初の計画では高さ15メートルぐらいのご像は1861年に立てられ、修復後の1880年に高さ16.8メートルのご像になりました。

フランス革命の時期を除いて500年間、町は中断されることなく巡礼団を迎えました。マルグリット・ド・ヴァロワのような女王たち、王子たち、執政官、告解者の団体、アジャン、ギュイエンヌや周辺県の小教区の信者たちが次から次へとボ・ナンコントルに集いました。巡礼は何よりも聖母マリアへの信心業で、主にマリアの月である5月に行われました。(Cf. <https://fr.wikipedia.org/wiki/Bon-Encontre>)

ボ・ナンコントルの聖母への祈り

私たちの先祖が非常に愛し、

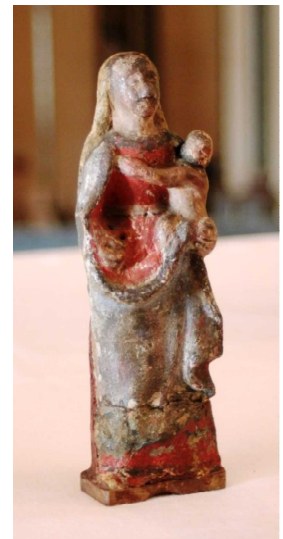
私たちもまた、彼らの模範に倣い、大切に思う聖母よ、
あなたが先祖たちにしてくださったように、
あなたの聖なるご保護のしるしを優しく、
慈愛深く私たちにお与えください。

必要に当たって私たちを助け、

あらゆる苦しみにあって私たちを慰めてください。

そして、この世の生活で援助して下さった後、

死の時に私たちをお助けください。



小さなご像

両創立者とボ・ナンコントル

アデルの時代にボ・ナンコントルは巡礼のための人気スポットでした。その手紙のなかにいくつかの言及があります：

親愛なるアガタ、あなたは、ボ・ナンコントルへの巡礼を十分享受されたことと思います。

神さまは何と慈愛深く、何と私たちの弱さを助けてくださることでしょう。ですから、私たちは神さまの慈愛の故に喜び、感謝し、そして信頼、平和に充たされるべきではないでしょうか。(No. 278 アガト・ディシュ宛 1815年9月20日)

あなたのお母さまはお元気です。お母さまは3日間、ノートル・ダム（ボ・ナンコントルの聖母）へ行ってお越しされました。私たちは皆大体元気にしています。(No. 404 メール・テレーズ・ヤンナシュ宛 1820年9月15日)



アデルが以下に述べているように、フランス革命の時に、ボ・ナンコントルの聖母像は汚され、革命後、償いのための巡礼行列が計画されました：

こちらでは、Congregacionの会員がすべての階層で増えています。Congregacionは熱意に溢れています。

今日、大変感動的な行列がありました。その意図は以下の通りです。革命の時には、聖なるおとめマリアのご像を嘲ったり、引きずり回したり、居酒屋に運び込んだりして汚しましたが、今日、新しい聖なるおとめマリアのご像をお運びする行列が、ここから1リュ（約4.8km）のところにあるボ・ナンコントルのノートル・ダムで、厳かに行われました。男子Congregacionの会員たちがご像を運び、ベールを被った白い服の若いお嬢さんたち、そして白い服と黒い服のご婦人たちは、聖なるおとめマリアの連祷を歌ったり、きれいな旗印を持ったりなどしました。その旗印は償いとして、その教会にささげました。ペロック夫人とヤンナシュ夫人も参列しました。(No. 305 ロロット・ド・ラシャペール宛 1816年8月16日)

最後に、メール・マリーヨゼフ・ド・カステラがしたためたアデルについての回顧録で、彼女はアデルの病気の進展状況に触れました。アルボワに到着してからアデルと同様にずっと病気だったメール・マリーヨゼフ・ド・カステラ自身についてのニュースは明るいものであった1826年の終わり頃：

ボン・メール・ド・トランケレオンについてのニュースはそうではありませんでした；心配が増していました；彼女の回復のためにあらゆる方面からの祈りが天にあげられ；当時有名な奇跡を行うホーエンローエ侯爵と力を合わせ、侯爵の神への力強い影響力を祈願し9日間の祈り（ノバナ）がささげられました。アジャンのCongregacionの人たちは、ボ・ナンコントルの聖母のところに行列して出かけました。そこで、アデルの病気回復の意向にそって皆ご聖体をいただきました。しかし、その実りは、アデルの回復というより、天国への旅路となりました。

数年間アジャンでの生活を余儀なくされたシャミナード師が、ボ・ナンコントルに足を運んだ可能性は高いと思われますが、師の手紙にも、師について書かれた文献にも、師の“巡礼”についての痕跡はありません。

“よき出会い”の神秘、ご訪問についての黙想（ルカ1・39-56）

このご訪問の神秘は、出会いと愛徳の神秘です。マリアは、いとこのエリサベトに会いに行きます。その訪問によってエリサベトは、また洗礼者ヨハネも、神の子に出会うことになります。この出来事は何よりも愛徳の神秘です。イエスを他の人にもたらずということよりもっと素晴らしい、もっと美しいことがあるのでしょうか？今の時代の人々に、また私たちの生きているところに、イエスに示された神の愛を知らせることよりもっと偉大なことがあるのでしょうか？

マリアは急いでいとこエリサベトのところに行きました：マリアが身ごもった方の愛は待つことは出来ないのです。聖パウロが言うように、愛というものはそれ自身を伝えるものです。“キリストの愛が私たちを駆り立てています”（二コリント5・14）。従って、マリアは愛徳、神の愛の第一の宣教者であり、イスラエル人に、そして人類全体にイエスをもたらず最初の方です。彼女は、私たちと人類全体を代表して、神の天使に“はい”とおっし



やった方です。このようにして神が初めからお望みになったことを一人の人間（マリア）が完全に受け入れました。

マリアに倣って、イエスを人々にもたらすこと、人々と出会うことは、すべてのキリスト者、私たち一人ひとりの使命ではありませんか？洗礼を受けたことによって、私たちは“キリストをもたらすもの”、“クリストファー”となりました。福者パウロ6世、聖ヨハネ・パウロ2世、ベネディクト16世に続いて、教皇フランシスコは、教会の第一の使命を絶えず私たちに気づかせてくださいます：“教会はまさに宣教するために存在しています。すなわち、教えを説き、恩寵をあたえる手段となり、罪人を神に立ち返らせ、キリストの死と栄えある復活の記念であるミサ聖祭によってキリストの犠牲を永続させるために教会は存在しているのです”（「福音宣教」No. 14）。それはすべてのキリスト者の使命です。教会の生活の一部分であるように、洗礼を受けたものとして私たちの生活の一部分でもあります。

私たちはどのように他の人々にイエスをもたらすことができるのでしょうか？私たちは共同体として現代の人々にイエスの愛をどのように示すことができるのでしょうか？福者シャミニナード師はこう述べています：“あなた方は皆宣教者です”、“至聖なるおとめマリア”に奉仕する宣教者です。マリアのように、マリアとともに、今日の人々をキリストと出会うようにすること。真理のうちに他者と出会うことによって、彼らを救ってくださっているキリストを彼らにもたらすこととなります。

福音書にあるご訪問の場面を黙想するとき、意外性に富み、喜びに満ちた人間同士の出会いを見ます。その喜びの源は、マリアが体内に宿す愛の結晶である御子イエスです：イエス、つまり、“主が救う”。この喜びこそマリアがいとこのエリサベトにもたらすもので、最初にこの喜びによって恩恵を受けたのは、母の胎で反応した洗礼者ヨハネでした。事実、エリサベトは：“あなたの挨拶を聞いたとき、胎内の子がおどった”と言いました。ヨハネはイエスがいらっしゃるといふ恵みに感動したのです。

マリアとエリサベトの出会いは、真の出会いは何であるかについて、私たちが考えるようになりたてます。出会う一人が幸せになり、心の平穏を覚えて別れ、もう一人が同じ気持ちをもっているような出会いは本物であると考えられます。私たちを成長させ、私たちに神がより近い存在となる出会いは本物の出会いです。マリアの心から喜びがほとばしりました。それは、マリアは主が自分になさったことを分かっていたからです。主がくださったすべてのものは、ある意味において、お告げのときにマリアに与えられた“恵みに満ちた方”という新しい称号に要約されました。主が私たちになさったことを認識するためのすべが分かりますか？主がなさったことに対して喜びを感じますか？その喜びを分かち合いますか？喜びというのは、非常に人に伝わりやすいものです。

天使のお言葉を信じたことによって、マリアは“幸い”だと宣言されました。それは信仰の喜びです。信じること、神の言葉に信頼をおくことです。神はおっしゃることを必ず実現なさいます。そのために神に信頼をおくことは重要なことです。マリアのうちになさったように、神は私たちに偉大なことをなさいます。洗礼によって私たちは神の子供になったのではありませんか？私たちは、愛された子供のように神に愛されているのではありませんか？初子イエスのように、私たちはイエスの母によって自分の子供たちのように愛されているのではありませんか？また、私たちは、マリアの使命のために働く、つまり、他のキリスト者を形作ること、

シャミナード師がおっしゃった“キリスト者を倍増する”ということに幸せを覚えていますか？真理のうちに御子イエスに出会い、何よりも御子イエスを愛する恵み、そして、御子イエスを人々にもたらず喜びを、ポ・ナンコントルのおとめマリアにお願いいたしましょう。

共同祈願

① 主よ、男女マリアニスト修道会創立 200 周年記念の年にあたり、汚れなきマリア修道会とマリア会を与えてくださったことを感謝いたします。世界の至るところでその召命を生きているマリアニスト家族のメンバーが、司祭および修道者の召命を鼓舞し、支えていくことができますように。

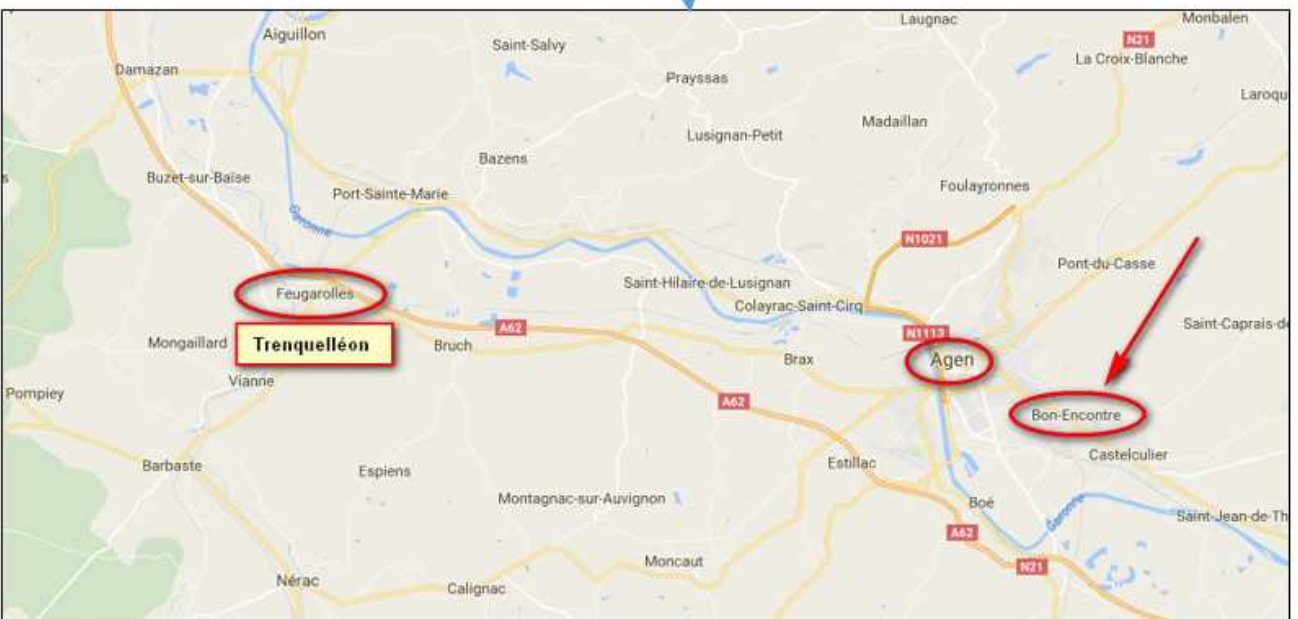
② 常に個人主義的で、霊性に対して背を向ける世界、特にいわゆる発展した国々においてキリスト教的生活の価値がしばしば誤解され無視される世界、このような世界がますます危険に陥っている現代であって、主よ、私たちは全世界の若者たちのためにお祈りいたします。彼らがどこにいても、どうか福音を証しする信仰の男女とならせてください。彼らの中から、世界の至るところであなたのわざを継続できる新しい修道者と司祭の召命を呼び起こしてください。

③ 私たちの教皇フランシスコは、特別聖年を祝うようカトリック教会に呼びかけられました。この「いつくしみの特別聖年」は、無原罪の聖マリアの大祝日にローマの聖ペトロ大聖堂の聖なる扉の開門を持って始まり、王であるキリストの大祝日に終了します。主よ、教会が全世界にとってキリストのいつくしみの目に見えるしとなりますように。



丘の上の聖母

④ 主よ、私たちマリアニストの小教区共同体のために祈ります。これらの共同体には少なくともマリアニスト家族の一つの枝のメンバーがいて、その宣教精神を通して、マリアの助けの下にキリストの愛を知らせようと努めています。神の全人類への愛の計画に対して決定的に“はい”と応えたマリアに倣うものとなるよう、小教区共同体全体にあなたの聖なる霊をお送りください。



アジャン周辺、ボ・ナンコントルの場所